

日本ジオパーク再認定審査結果

日本ジオパーク委員会

日本ジオパーク委員会は、2025年10月から11月に現地調査を行った15地域の日本ジオパーク再認定の可否について審議し、以下のとおり決定した。

再認定：磐梯山、下仁田、秩父、男鹿半島・大潟、佐渡、四国西予、おおいた姫島、
おおいた豊後大野、三笠、とかち鹿追、三島村・鬼界カルデラ、
島根半島・宍道湖中海、土佐清水、十勝岳、五島列島（下五島エリア）

現在、日本ジオパークは48地域である（うちユネスコ世界ジオパークは10地域）。

再認定

磐梯山

構成自治体間の定期的な情報共有や、各種団体・学校等と協力関係を構築した成果が、学校や裏磐梯ビジターセンター、パートナーと協働した教育・ツーリズムに表れるなど、アクションプランに沿った運営が着実に進められている。ガイド団体等が参加したサイトの管理や、植生調査と連動した保全活動を展開している。今後、事務局体制の強化に力を入れることで、教育・ツーリズム・持続可能な開発等の活動がさらに推進されると期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

下仁田

ジオパークの会、自然史館、そして自然学校など、複数の団体の献身的な活動により、地質に加えて自然や文化遺産への注目も高まった。その結果、教育や観光、地域づくりの分野でジオパークの考え方を取り入れる住民や団体が増えた。今後は、保全計画を策定し、情報発信を効果的に行うことで、地域住民に加えて来訪者も本ジオパークをより深く知り、学び、楽しむことができると期待される。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

秩父

パートナーシップ制度の整備、住民と連携した地質や文化遺産をいかしたツアー開発など、経済活動にジオパークが活用され、住民にとってもジオパークが身近な存在になった。今後は、次世代の人材育成、ステークホルダーとの連携強化などにより、活動のさらなる展開が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

男鹿半島・大潟

鵜ノ崎海岸の小豆岩（鯨骨コンクリーション）^{あづきいわ げいこつ}の研究・保全・展示、サポートーズクラブや企業向け研修会を通じたジオパーク活動への参加など進展が見られた。今後、地質遺産と自然・文化遺産を結び付けたストーリーの活用や次世代の人材育成にさらに取り組むことにより、ジオパークが持続可能な地域づくりの核として発展していくことが期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

佐渡

この2年間でサイトの整理を進め、地形・地質と歴史・文化との関わりを示したストーリーが整備され、ジオツーリズムにいかされている。海でのプログラムの開発も進んだ。集落における地域説明会の実施により住民のジオパークへの理解が深まり、新たな歴史資源が掘り起こされた。今後は、世界遺産や世界農業遺産との連携をさらに進め、ジオパークの活動がより充実することが期待される。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

四国西予

ジオパーク活動の推進に熱心な住民、団体が多く存在し、持続可能な地域社会の実現のため、ボトムアップの活動を積極的に展開している。ジオミュージアムは精力的にイベントや企画展を開催し、ジオパークの学習拠点として大きな役割を果たしている。また、ツーリズムによる経済活性化に向けて、協議会と観光物産協会が連携し様々なツアー商品を開発している。今後、ジオパークのさらなる可視性の向上に努め、長期的視点でジオパーク活動を継続していくことに期待する。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

おおいた姫島

ユネスコスクールである域内の小中学校では「ESD カレンダー」を活用した体系的な学習が展開されている。また、他のジオパークとの学校間交流が進展し、地域の価値の再認識に寄与している。国の重要文化的景観と連携したジオパーク活動も進んでいる。今後は、管理運営計画の住民との共有、ガイドの育成、パートナーシップの可視化などの課題に取り組むことで、さらに活動の進展が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

おおいた豊後大野

継続したジオパーク教育やガイド活動を通じて、住民の地域に対する愛着が増している。また、化石観察ガイドラインの策定や地質物品販売の縮小に向けた事業者との対話、国の重要文化的景観選定によって、地質遺産や文化遺産の保全も進んだ。今後は、住民が参画しやすい協議会の体制にすることで、さらなる発展が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

三笠

教育旅行を含むジオツーリズムの推進や石炭廃坑の活用、高校生レストランやワイナリーとの商品開発など、多様で活発な取り組みが進んでいる。国の補助金の活用やふるさと納税などによる財源も確保してきた。今後は、ジオパーク独自の基本計画策定や外部団体との役割分担を明確にし、運営体制を整えることで一層の発展が期待される。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

とかち鹿追

行政、各種団体、地域住民が連携し、ボトムアップ型のジオパーク活動が組織的に展開されている。また、自然遺産のモニタリング体制の強化、カーボンニュートラルへ向けた取り組みを通じて気候変動適応策が進展している。ジオパーク関連絵本を活用したイベント開催により、教育普及や地域文化振興が促進されている。今後は、自然環境のさらなる保全と地域開発を調和的に進める取り組みに期待する。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

三島村・鬼界カルデラ

鬼界カルデラなどの研究における学術組織との連携の深化、小中一貫校4校でのジオ科教育の充実、フェリーや港での展示整備による可視性向上などの取り組みが進展した。今後は、村役場全体の参画によりジオパーク基本計画を早急に策定することで、人口規模の小さい離島としての諸課題を乗り越えた運営モデルの実現が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

島根半島・宍道湖中海

斐伊川と出雲平野の地形とたら製鉄の関わりがストーリー化されるなど、神話や伝承以外の新たなコンテンツが開発された。事務局は松江市、出雲市、島根大学の三者をコアとし、連携の取れた運営が行われている。地域の活動がボトムアップ形式で進められ、新たな担い手も出てきている。今後、地域内の登録資産との連携や可視性向上などによって、さらなる展開が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

土佐清水

国立公園ビジターセンターを拠点施設として、教育・防災・保全分野で住民参加や学校との連携、調査研究など広範な活動を進めてきた。サイトの位置や防災情報などを含むWebGIS（インターネット地理情報システム）の公開、地元気象台との協力関係構築が行われた。今後、ジオパークの可視性をさらに高め、ガイド団体やエリア内外の事業者と連携することで、持続可能なツーリズムの展開が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

十勝岳

宿泊施設にハザードマップを配備し、3つの拠点施設や魅力的で分かりやすい解説板、ジオパークを示す看板を整備し、可視性を向上させた。またジオガイドの養成を進めるなど指摘事項に着実に対応した。さらに、環境省と生態サイトの保全を推進、国土交通省と「インフラ・ジオツーリズム」を導入、2025年にはJGN全国大会の開催など、活動を発展させた。今回充実させた事務局体制に加えて、今後、より活動しやすい運営体制に移行することで、さらなる展開が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

五島列島（下五島エリア）

世界遺産・国立公園との連携強化を行い、地元関係者との合意形成により、水晶岳の希少な地質遺産を有するサイトの保全方針を策定するなど、課題に取り組んできた。教育プログラムの体系化や無形文化遺産の継承活動にも進展が見られ、地域住民主体の活動を行っている。今後は、観光業など産業との連携を深めて地域経済の活性化にも貢献し、将来的には五島列島全体への活動波及を期待したい。

以上のことから、日本ジオパークに再認定する。

以上